

伊吹が D.D.D. の画面を待ち受けにしてから 10 秒ほどしてソロモンは伊吹の部屋に現れた。

「やあ、犬並みに嗅覚が良くなる魔法以外は何が使えるようになったんだい？」

「えっとー・・・これかな？」

そう言うのと伊吹は自分の手の平の中に部屋にあるクッションの映像を出してみせた。

「ほお、これは記憶の中にある映像を見せる魔法だね。他にできるようになった魔法はある？」

「後は・・・」

伊吹はソロモンの求めに応じて 2、3 個の魔法を目の前でやってみせた。

「うん。やっぱり俺が教えたのとは違う、伊吹独特の魔法になっているね」

「嘆きの館にいるのが影響しているかも？ってチャットで言っていたけど、どういうことなの？」

「それを説明しにここに来た」

ソロモンはそういうと空中に手をかざし魔力で逆三角形の幻影を作った。

「それは・・・？」

「これは周辺にある魔力や変化を調べるためのセンサー。こんな風に空気中を調べるのに使うんだよ」

「軍隊のレーダーみたいなのかな？」

「そうだね。人間界で言えばそれが一番近い」

「私にもできるかな？」

「アハハ、今度教えてあげるよ」

ソロモンはしばらくの間伊吹の部屋の周りを調べると部屋を出て廊下を調べ始めた。

途中マモンに会ったのか、微かにマモンが驚く声が聞こえた。

部屋に戻ったソロモンはどこか嬉しそうだった。

「伊吹、教えた魔法が独自の者になる理由が分かったよ」

「なんだったの？」

「やっぱり嘆きの館に住んでいるということが影響しているみたいだ」

「なんで嘆きの館に住んでいるのが影響するの？」

「伊吹は魔術の練習をいつも嘆きの館でしているだろう？」

そう言いながらソロモンは伊吹が座るベッドに腰を下ろした。

「これは実際にやって見せた方が早いから、俺の手の中をよく見ていて
そう言うとソロモンは自身の魔力を手の中に出し球体にした。

「今、俺の魔力は水色になっている」

「うん」

「これに嘆きの館の空気を入れると・・・」

「紫色になった！」

「面白يدろう？」

「うん！」

「この嘆きの館は元々いわくつきの場所ではあったけど、今となってはルシファーを始めとした兄弟たちの魔力であらゆるところが染まり切っているんだ。魔法の練習をしている間というのは周辺にある空気はもちろん、魔力も吸いこんでしまう状態になるから自然と伊吹の魔力と嘆きの館にある空気が混ざり合って独自の魔力になる。」

その結果、伊吹の魔法は俺が教えたはずなのに独自の魔法になる。というわけなんだ」

ソロモンはパンと手を軽く叩くと魔力を自分の体内に戻した。

「へー、嘆きの館の空気・・・」

「ちよつと魔力を出してみて」

「はい」

そう言われて伊吹が自身の魔力を手の中に出すと、ソロモンは興味深そうに伊吹の魔力を眺めた。

「やっぱり兄弟たちの魔力の色がわずかに見えるね。特にルシファーの影響が強いかな？」

ソロモンに言われ、伊吹は思わずルシファーと肉体関係があることを思い出した。

「あ？身に覚えあり。かな？」

「そ！そんなことない！！」

手を振って否定する伊吹の様子にソロモンは微笑まし気な笑顔を向けると伊吹の手を取った。

「でも正直なところ少しやきもちを焼いてしまうよ」

「え？」

「だって、伊吹は俺がいくら魔術を教えても俺と似たようなものにはならない。って事が分かってしまったから」

「えー・・・？それって・・・どういう意味？」

「永遠に俺の色には染まらないということ」

一言そう言うとソロモンは伊吹の体をそっとベッドに押し倒した。

伊吹が見上げるソロモンの顔は今まで一度も見ることがない男の顔になっていた。

「だからそれを今すぐ止める」

「え？止める・・・？」

戸惑う伊吹にソロモンはにこりと微笑んだ。

「今日は特別な魔法を教えてあげるよ。俺と伊吹の間でしかできない特別な魔法だ」

「特別な魔法・・・？」

「そう。特別な魔法」

「きゃ!？」

ソロモンが軽く指を鳴らすと突然伊吹の衣服が消えた。

突然全裸になってしまった伊吹は慌てたように胸を隠そうとしたがソロモンの力強い手でさえぎられてしまった。

「意外と良い体していたんだね」

ソロモンの視線が恥ずかしく伊吹は頭を横に向けた。

「そんなに恥ずかしがる必要はない。これから二人で特別なことをするんだから」

ソロモンの唇が伊吹の首筋をそっと撫でた。

伊吹は思わず変な声を上げそうになったがぐっとこらえる。

「嫌かい？」

伊吹はどう返答をしたらいいのか分からない状態になっていたがなんとか言葉を返すために頭を回転させた。